

1 章 心エコーを学ぶにあたって

1-1 レポートの型を身につける

勉強会で心エコーを学んでもらうにあたって、その目標について少し話をします。最近、医師にとって心エコーの敷居が高くなってしまったと感じます。外科でも内科でも、腹部エコーに加えて心エコーも技師さんに任せることが多くなっています。医師はカテーテルや外来といった医師にしかできないことをすればいいという考え方が背景にあるのでしょうか。分業制が悪いわけではありませんが、同じ誰かに任せるにしても、自分も心エコーができた上で、技師さんに任せたほうがいいでしょう。人任せにしないこと、これは技師さんや看護師さんも同様です。心エコーについて、しっかりと学んでいきましょう。

心エコーは、上手な人の後ろで見学しているだけでは実力がつきません。初歩的な部分だけ教えてもらったり、セミナーに行ったりしたあと、自分で撮るだけで、検証しないというパターンも同様です。能動的な勉強ではあるものの、ただ撮るだけではフィードバックを得られず、実力を伸ばせません。

一方、心エコーをしながら後ろから教えてもらうことができれば、ある程度実力はつきます。そのうえで自分の考えを交えたレポートを書き、それを検証してもらったり、ディスカッションしたりするとさらによいでしょう。これが最も実力を伸ばすことができる方法で、心エコー上達への早道と言えます。さらに極めるには臨床研究がありますが、初学者はさすがにこまではできませんし、しなくてもいいと考えています。

まずは所属している施設の書き方でレポートをしっかりと書けるようになると、応用が利きます。裏を返せば、この空手の型にあたるような1つの書き方を身につけていないと、いつまでたっても上達は難しいでしょう。

今回の勉強会では、初心者でもレポートの「型」ができるように学んでもらいます。また、最低限これらは知っておいてほしいという症例についても紹介します。通常だと患者さんを不安にさせてはいけけないので、検査中に言葉でのディスカッションはできません。しかし、今回は私の不思議な力を使って、架空の患者さんを出現させます（どんなものかは当日のお楽しみね）。

1-2 検査時のマナーと心がけ

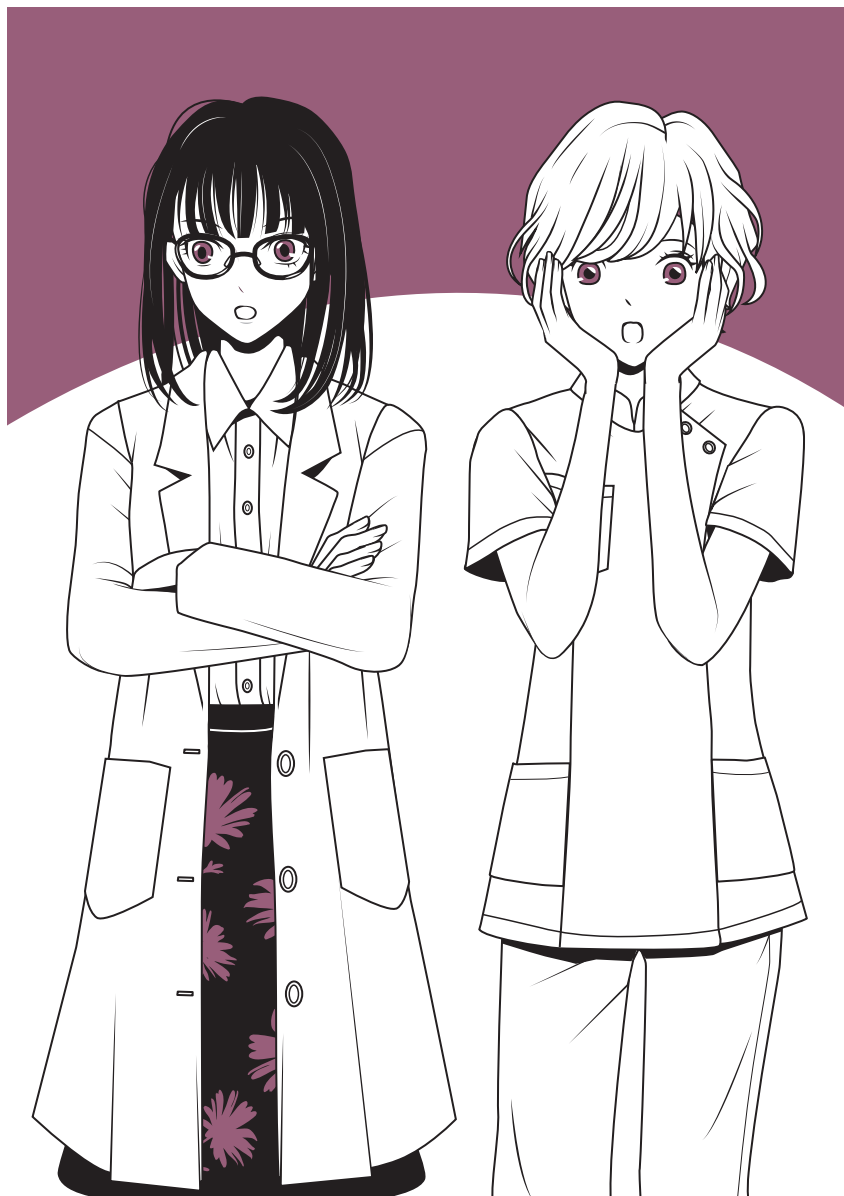
次に、心エコーをするにあたって心がけてほしい注意点を説明します。普段から何度も検査をしていると、気づかないうちに流れ作業のようになってしまいう恐れがあります。私たちには検査は日常かもしれないけれど、患者さんにとっては違います。検査が初めてという人もいれば、1年ぶりの検査でその内容をすっかり忘れている人もいるでしょう。

それなのに、挨拶や説明をせずにいきなりプローブを当てるのはとても失礼な行為にあたります。心エコーを行う前に必ず、患者さんに挨拶と自己紹介、検査の説明をしてください。

また、患者さんにとって検査が苦痛にならないよう気遣いも忘れてはいけません。男女に関係なく、検査前に胸部や腹部を足元からタオルで覆ってあげるように心がけましょう。意外と多いのが、検査者がズボンの右ポケットに財布を入れたままにしていることです。このポケットに物を入れていると、検査中に患者さんの背中に当たることもあり、ストレスをかけることになってしまいます。

技術面だけではなく、こうした挨拶や身だしなみといった面でも十分な配慮が求められます。これは心エコーのみならず、医療全般に言えることです。大事なことです。忘れないように気をつけましょう。

エピソード 1 (8月1日)



翌日、朝食後に別荘の周辺を散策した奏たちは、いよいよ始まる勉強会のために着替えを済ませ、本館のリビングへと向かった。そこですでに、ツユリが仕事着に身を包んで待っていた。

療養期間に入るまで、彼女は循環器内科と一般内科で勤務しており、それ以前は消化器内科を専門としていた時期もあった。アグレッシブな性格は仕事にも活かされ、がん治療や急性心筋梗塞などのカテーテル治療に従事。夜間の呼び出し対応や心エコー検査の責任者でもあり、心臓リハビリテーションのセンター長も兼務していた。さらに、一般内科や放射線科の読影にも精通している。くっきりとした目鼻立ちの美人で、弟と同様に少々クセのある髪を肩まで伸ばしていた。

この勉強会で指導する先生はもう 1 人いた。ツユリの同僚でもあった女性医師だ。約束の時間の直前に、「はじめまして～、お待ちせしました」と言いながら白衣姿の当人は部屋に入ってきた。小顔で和風の美人という言葉がぴったりと当てはまるその容姿は、奏たちにも見覚えがあるものだった。

「昨日の人だ!」

奏と円は、昨日手短に挨拶をした女性のことを瞬時に思い出した。同時に「聞き間違いでなければ、この人もつゆりさんだったような…」という記憶も再浮上したが、それが聞き間違いでないことはすぐに証明された。その白衣に「つゆり」とひらがなで刺繍が入っていたのだ。

「よろしくね、つゆりちゃん」

そう声をかけたのは車椅子のツユリだ。彼女の胸元には、カタカナで名前が刺繍されていた。それを指差しながら「私たち、苗字と名前が同じなの。しかも昔から気があって、一心同体みたいなの」と笑うツユリに、奏たちはただ驚くばかりだった。ちなみに、この刺繍がきっかけとなって、円と奏はこっそりツユリをカタカナ先生、つゆりをひらがな先生とも呼ぶようになった。

各自が改めてフルネームなどの自己紹介を終えたところで、最後の 1 人にして、奏らと一緒に教えるメンバーが入ってきた。ホズミだ。もともと彼は、理学療法士としてキャリアを積んでいたが、検査技師に職を変えて 2 年目を迎えている。仕事でも発揮される冷静な判断力を持ち、未経験のエコーを学ぶ意欲にあふれていた。ちなみに、ふだんは温厚な人柄で口数こそ多くはないが、たまに冗談も交えることがあった。

そんなホズミから「お姉さん、よろしくね」と声をかけられたつゆりが「も～、お姉さんって呼ばないで!」と応じたところで、ツユリがそろそろ勉強会を始め

るべく切り出した。

「奏ちゃんも円ちゃんも、勉強会も謎解きもいろんな可能性を意識して、これからの1週間を楽しんでね。ただ、勉強会はプライベートとは気持ちを切り替えていきましょう。たとえ肉親でも、親しき仲にも礼儀ありよ。もちろん、勉強会ではわからないことがあったら、遠慮せずどんどん質問してね」

勉強会用の部屋へと案内された奏たちは、再び驚くことになる。この建物はかつて、診療所として使われた時期もあったのだが、そこには病院のエコー室が完璧に再現されていた。エコー機器をはじめとした医療機器がずらりと揃っている。奏と円はしおりに書かれていた「不思議な力」の話を思い出していた。この設備はしおりに書かれていた不思議な力によるものなのか、それともツユリの財力や人脈によって実現したものなのか…。2人には想像がつかなかったが、すぐに勉強会モードへと頭を切り替えた。

ツユリがこの勉強会の様子ICレコーダーで記録することを説明すると、いよいよ会がスタートした。